

【第60回全国大会公開講演概要】

翻案者の使命——映画と小説の表現について

水川 敬章

本講演では、日本近代文学研究および表象文化に関する研究という立場から、「翻案／アダプテーション」における表現の問題を主題に据えた。翻案／アダプテーションの表現の特質を把握するための方法的・理論的な次元について整理検討を行い、それに基づき西川美和監督の映画『ゆれる』とそのノベライゼーションを対象に、具体的な分析と考察を行った。

まず、複数の専門領域で活躍する研究者が集う本学会の特徴に鑑み、議論の前提となる講演者の立場を明らかにするところから、本講演の議論をスタートさせた。日本文学研究で言うところのテキスト論的な立場をとることで、作家や翻案者の意図の反映を実証する研究とは異なる立脚点を確保し、翻案／アダプテーションそれ自体を自律的な文化現象として捉える観点が報告の前提にあることを述べた。また、このような分析態度故に、タイトルの「翻案者」という表現が、翻案を行った創作主体の意図を問うことにつながる、具体的な行為主体を意味するものではないことを強調した。併せて、「翻案者」とは、翻案／アダプテーションの表現が成立するメカニズム自体の運動それ自体を、擬人化して称したものであることも説明した。

次いで、日本国内で積み重ねられてきた日本近代文学研究において散見される、「アダプテーション」という理論用語の使用について検討を行った。ごく最近に発表されたアダプテーションを方法的主題とした著作と論文を参照し検討することによって、日本近代文学研究においてわざわざ「アダプテーション」というタームが使用されることの背景には、リンダ・ハッチオン『アダプテーションの理論』（原著2006、邦訳2012）の影響が顕著であることを確認した。その一方で、日本近代文学研究におけるハッチオンの理論受容の傾向としては、その理論的独自性が必ずしも継承・援用されているわけではないことを指摘した。この現状に対して、ハッチオンの理論が持つ射程に再度目を向ける余地が存分にあること、そして、「アダプテーション」という術語を敢えて用いることの意義を問い直す必要性があることを主張した。この主張をさらに展開するために、ガイダンス的な論文 Kamilla Elliott, *Theorizing adaptations/adapting theories*, in Yvonne Griggs, *The Bloomsbury Introduction to Adaptation Studies*, Bloomsbury Publishing, 2016 を引き合いに出しながら、日本国内の日本近代文学研究ではほぼ等閑視されてきた、アダプテーションの理論化をめぐる複雑な問題機制の来歴があることを確認し、日本近代文学研究におけるアダプテーション理論それ自体の問い直しの必要性があることを述べた。加えて、日本語圏で展開されてき

た、英米欧文学研究を中心としたアダプテーション研究の成果がもたらしてくれる示唆についても言及した。

後半は、講演者の翻案／アダプテーションの理論的理解の提示と具体的な作品分析を展開した。講演者の理論的な理解については、カルチュラル・スタディーズ、トランス・メディア論、クレメント・グリーンバーグおよびロザリンド・クラウスによって呈出されたメディアムをめぐる概念、さらにはヴァルター・ベンヤミン「翻訳者の課題」などの諸理論を参照しつつ、それらを敢えてショートサーキット的に接続させることによって、その枠組みを描出した。その結果、同一性(セიმネス)から翻案／アダプテーションを問い直すことが、文学理論的かつ政治的批評性を確保することにつながると主張した。この理論的視座に基づきながら、映画『ゆれる』と小説『ゆれる』の翻案／アダプテーションの表現を検討し、その表現の豊穡さと可能性を論じた。映画のショットと言語表現の関係性に焦点を当て、この理論的観点によって照射される表現が、最も特徴的にあらわれるシーケンスを取り上げて分析を試みた。

(神奈川大学)